

動き出した

家庭医療教育ステーション



本町と鳥取大学との連携によって大山診療所に家庭医療教育ステーションが整備され、通常の診療と医学生の実習とが行われるようになった。

動き出して間もないが、現状や今後の展望、医師や学生の想いを取材した。

患者と談笑する先生

先生と学生の現状

【委員】まずは現状を聞かせてください。

【朴先生】4月1日から固定医として患者さんの顔や病歴を覚えることから始め、ようやく業務として落ち着いてきました。

と同時に、4月初旬から週に1人から2人の学生を受け入れ、実際に患者さんとコミュニケーションをとる実習もスタートしています。

【委員】実習の内容はどんなものですか。

【朴先生】初めて患者さんと接する学生なので、初めは私の真似をしてもらいます。慣れてきたら、直接患者さんから症状などを聞いてもらう実習です。

学生は医学的な問診で頭がいっぱいですが、実は患者さんとコミュニケーションを取りながら聞き出すのは容易ではないんです。そういった経験をしてもらっています。

医療行為としてできることは多くはないですが、可能な部分は経験してもらおうようにしています。

家庭医療とは

【委員】家庭医療という言葉は聞き慣れませんが。

【朴先生】日本の制度上、家庭医という言葉は使われてないですけど、国際的には開業医のことを指します。日本では総合診療医と呼ばれ、地域医療の崩壊や全身を診れる医師の不足という状況のなかで、鳥取大学としてもそういう医師を育てる必要があると考えています。

内科も小児科も診るし、簡単なものであれば外科的な処置も行うのが家庭医で、例えるなら身体の状態を診るマネージャーのような存在ですかね。

【委員】普段使い、というところらえ方でしうか。

【朴先生】その通りで、距離的にも心理的にも近い医師のことです。

【委員】往診などについてはどう考えておられますか。

【朴先生】町内であれば遠方でも出掛けていきます。

家庭医が身近にいて診療してくれることは、住民が幸せな人生や暮らしを送るうえで重要だと思っています。